

公共性を問い直す

ー民主主義とコンセンサスの危機についてー

第1回 なぜ公共性が重要なのか

講師：小谷英生（群馬大学准教授）

目次

第1回 なぜ公共性が重要なのか

第2回 公共性とコモンセンスの概念整理

第3回 カントの公共性を解釈する

第4回 公共圏の拡大浸透－アーレントを手掛かりに

なぜ公共性なのか？

- ・ 現代ではインターネットの普及や民主主義の行き詰まりとともに、再注目されている（されるべき）概念だから。
- ・ 公共性の確保は民主主義の基礎であり、私たちの個人としての自由・平等・公平を担保する上で必須であるから。
- ・ 公共性の尊重は私たち一人ひとりを尊重することにつながるから。

公共性とは？

- ・ 第一に、**政治的な意志決定プロセスにおける「公開性」**を意味する。

例えば菅義偉総理による日本学術会議会員任命拒否問題では、関連法律制定時の国会答弁や前例を無視した決定がなされたにも関わらず、その理由は明らかにはされませんでした。

学術会議がどういう団体なのか、どういう活動を行っているのかという問題とは別に、**説明責任を果たしていないという手続き的理由によって**、菅総理の振る舞いは政治的な公共性に反していると言えるでしょう。

公共性とは？

・この意味での公共性は、**民主主義が独裁・秘密政治に陥らないために重要。**



民主主義であるからには、国民には知る権利があり、執政者は主権者である国民に対して説明責任を負います。憲法第65条にも「内閣は、行政権の行使について、国会に対し連帯して責任を負ふ」とある通りです。

*最近、任命拒否された6名の研究者が、内閣府や内閣官房に情報開示請求を行ったとのこと。（2021年4月26日のNHKニュースより

<https://www3.nhk.or.jp/news/html/20210426/k10012997851000.html>）

著名な研究者がこうしたことに忙殺されている状況は、社会にとっても人類にとってもマイナスでしかありません。

公共性とは？

- ・ 第二の意味として、**私たち一人ひとりが社会問題について自由に議論をしたり、活動するような「公共圏」（および「公共圏」で順守されるべきモラル）がある。**
- ・ とりわけモラルという点では、**「公共圏」への参加を不当に妨害したり、活動を萎縮させるような圧力をかけることは許されない。**

公共性とは？

このモラルとしての「公共性」は、しばしば**コンプライアンス**という言葉で表現されます。

関連する時事問題を挙げれば、森喜朗元オリンピック組織委員長の問題発言がありました。ラグビー協会の女性理事を念頭に「女性がたくさん入っている理事会は時間がかかります」と揶揄したり、オリンピック組織委員会については、（推測するに）女性理事が議論参加に消極的な様子を見て、「わきまえて」と評価？し、大問題に発展しました。

各委員会理事という公人（個人）を男性と女性に分け、しかも古い男性優位社会の女性らしさを〈わきまえている〉とみなし、女性理事たちを評価する。その評価がポジティブであれネガティブであれ、そもそもこうした論法に問題があります。しかもそれを公の場で述べることは、公共性に反します。

公共性の意義

- ・ 公共性概念は**公的手続き・振る舞いに関する道德規範であり、民主主義の基礎である。**
- ・ 公共性の確保は、**私たちの個人としての自由・平等・公平を担保する。**

公共性の意義

・例えば公的な場において、ある人が性別や肌の色によって意見表明の機会を奪われたり、意見を不当に無視されたりするならば、そのとき当人の自由・平等・公平は損なわれてしまっています。

*このような言い方をすると、「先の森元委員長は発言の撤回を強いられたじゃないか」とおっしゃる方もいるかもしれません。

たしかに、「公共圏」では基本的に、どのような人であれ、どのような意見であれ、寛容に扱われなければなりません。これを〈寛容の原則〉と言います。

ところが不寛容な振る舞いや不寛容な意見（分かりやすく言えば差別的な振る舞いや差別的な発言です）を許していくと、寛容な社会は崩壊していきます。

したがって〈**寛容の原則**〉は、**不寛容な態度・意見には適用されない**、というのが通常の解釈です。「表現の自由」を盾にヘイトスピーチが許されないのも同様の理由です。

公共性の意義

- ・公共性の尊重は**私たち一人ひとりを尊重することにつながる。**
- ・公共性は、権力の暴走を防ぐとともに、私たちと社会の結びつきを保証する点で重要。**政治における秘密主義や「公共圏」からの排除は、私たちの自己肯定感と自己効力感を著しく下げるから。**



説明責任を果たす、差別をしないといった公共性の尊重は、
私たち一人ひとりが尊重されているかを図る試金石。それは
生活水準や貧富の差とは別の社会的価値に関わる。

香港やミャンマーのデモから見えてくるのは、公共性とは命を賭して守るべきものである、ということです。このような論点は、例えばアクセル・ホネットの相互承認論（ex. 『承認をめぐる闘争』）でも展開されています。

新たな「公共圏」としてのインターネット

- ・インターネット、とくに匿名掲示板やHN（ハンドル・ネーム）文化は、人々の自由で平等な言論を可能にした。

- ・しかし社会的政治的な問題提起は**発言者に対するレッテル張りや誹謗中傷によって排除される**傾向も存在する。（非日本人、非モテ、フェミ、ブサヨ、ネトウヨ、アベガー、上級国民、無能、無職、低能など。）

こうした傾向に拍車をかけたのは掲示板やまとめ・切り抜きサイトであり、これらはインターネット上の新しいメディア権力として機能しています。例えばこの放送も、一部が切り抜かれ、サヨク認定され、過激な（あるいは小馬鹿にしたような）タイトルがつけられ、掲示板やまとめサイトで拡散されていく可能性がないわけではありません。**発言内容よりも発言者に注目が集まり、発言者は党派的なものに分類され、対立図式の中に書き込まれてしまうわけです。**



こうした「公共圏」の在り方は、公共性の本来の在り方からは逸脱しています。

新たな「公共圏」としてのインターネット

- ・問題は「**公共圏**」における**モラルの崩壊と、社会的分断**。

SNS 利用者の政治的クラスター分析から判明したのは、SNSという言論空間では自分に近い立場の人間同士で同質的な集団（クラスター）を形成する傾向があること。したがって自分の意見・立場と同じようなポスティングばかりを目にし、反対意見や差異は見えずらくなります。インターネット社会は一つの「公共圏」内部で分断対立しているというよりも、「公共圏」そのものが複数化し、分断対立するようになりつつあるようです。これは複数メディア間にも言えます。「テレビしか観ている人たち」と「ネットしか観ていない人たち」のように。

なお、「公共圏」という点から言えば、インターネットの発展は新たな「公共圏」を生み出しました。このテーマについてはメディア論や公共性の歴史的変遷、とりわけハーバマスの『公共性の構造転換』の延長線上で議論することが必要ですが、残念ながら今回は触れることができません。

公共性の危機

- ・公共性は無駄なコストか？



昨今の民主主義の危機とともに、公共性概念もまた、疑念の対象になっている。

例えば、一部ネットユーザーを中心に、議会軽視の強権発動的な行政執行が支持される文脈があり、そこでは野党やメディアの追及（＝公開性要求）が邪魔者扱いされてしまいます。統計不正や公文書捏造・破棄問題ですら、その真相追及は政権の「足を引っ張る」ものとみなされてしまう、というのは驚きです。

リーダーシップとスピード感（感ってなんだ？）が賛美されるところでは、公開性や説明責任といったものは**コストの無駄**扱いされるようです。

たしかに、執政者からすれば、民主主義はコストパフォーマンスが悪いのかもしれませんが。結果責任にやたらと拘る人から見れば、プロセスはいつでもよいのかもしれませんが。成功であれ失敗であれ、何を**どのように**行った結果どうなったのかを秘匿するというのは、行政経験の蓄積という点から大きな損失なのですが。

公共性の危機

- ・ **公共性こそが個人の自由・平等・公平を阻害している**のではないか？

先ほど指摘したように、「公共圏」における振る舞いのモラルという意味での公共性は、コンプライアンスという名称で普及しています。そしてしばしば、「コンプライアンスだらけの世の中は息苦しい」という意見を耳にします。

ジェンダー論やフェミニズムに対して否定的態度を取る人々も同様に、「好きなことを自由に言えない世の中」だと感じている方が多いようです。そしてこうした鬱憤がネット上の匿名言説空間におけるヘイトスピーチに繋がっている印象があります。少し昔になりますが、匿名掲示板利用者が好んでそれを「便所の落書き」「チラシの裏」と呼んだのも、表立ってできないことの憂さ晴らしという側面があったからでしょう。

公共性の危機

- ・「公共圏」の拡大浸透と、公／私の曖昧化

ネット空間でヘイトを垂れ流すことはモラルに反しますし、最近では法整備も進んできたので法にすら反します。とはいえ「コンプライアンスだらけで息苦しい」という感情も、まったく根拠のないものではありません。

少し前に芸人の岡村隆史さんの深夜ラジオでの発言が炎上しました。発言内容を擁護することはできませんが、深夜の「ノリ」がネットニュースやSNSを通して白日に晒されてしまうというのは、少し恐ろしく感じました。

私たちは自分の発言がいつどこでどのように暴露されるか分からない時代を生きています。楽屋（バックヤード）や飲み会でのプライベートな会話も、SNSなどを通じて公共性の審判にさらされる時代、とも言えます。そういえば出川哲朗さんも過去の言動が暴露されて炎上していましたね。

岡村さんも出川さんも性差別的な言動が問題になりました。インターネットの発展によってこうした告発ができるという点では健全な社会に向かっているとも言えますが、裏を返せばヘイトが溜まりやすい社会にもなっているように感じます。

公共性の危機

しかし繰り返しますが、公共性は、権力の暴走を防ぐとともに、私たちと社会の結びつきを保証する点で重要です。**政治における秘密主義や「公共圏」からの排除は、私たちの自己肯定感と自己効力感を著しく下げてしまいます。**公共性の毀損は、私たちに**居場所のなさ**と無力感を植えつけるのです。

まとめ

- ・公共性の確保は民主主義の基礎であり、
私たちの個人としての自由・平等・公平を担保する上で必須。
→公共性の毀損は権力乱用や個人の排除につながる。
- ・公共性の尊重は私たち一人ひとりを尊重することにつながる。
→公共的な存在として扱われることは、
社会的に承認された存在であることを意味する。

参考文献

- 大竹弘二、『公開性の根源 秘密政治の系譜学』、太田出版、2018。
- 齋藤 純一、『公共性(思考のフロンティア)』、岩波書店、2000。
- 同、『不平等を考える: 政治理論入門』、ちくま新書、2017。